

はじめに

この本を手にとった方は、少なからず植物に関心をお持ちなのだと思います。風景の中の草花が好きな方でしょうか。ご自身で植物を育てている方でしょうか。野菜や果物として味わうことが好きな方かもしれません。あるいは、私と同じように研究対象として植物を扱っている方もいらっしゃるでしょう。植物との関わり方は実に様々です。植物は、酸素を生み出し、食料となり、薬の材料にも、建築資材にもなります。さらに、写真や絵画のモチーフとして文化を彩る存在でもあります。私たちは、気づかないうちに植物の恩恵を受けながら暮らしています。

本書は、そんな奥深い植物を「顕微鏡で観察する」という方法を通じて楽しむことを提案するものです。「顕微鏡」という科学の道具を使うからといって、そこまで小難しい話をするつもりはありません。少しばかり解説も添えてはいますが、パラパラとページをめくり、細胞の1つひとつや、様々な色素から構成される緻密で美しい植物組織を見て植物の意外な姿に驚いてもらえるだけでも私としてはうれしいです。

本書に掲載している植物は、できるだけ身近なものを選んでいきます。また、本書は「植物断面図鑑」として主に植物の断面を扱っていますが、種によっては解説内容に応じて断面以外の顕微鏡写真も載せています。各植物の実物写真と顕微鏡写真を必ずセットで掲載するこ

とで、「普段目になっている植物」から「顕微鏡で観察した植物」までをつなげて考えてもらいやすくしました。

本書は全8章で構成されています。第1章から第6章までは、葉、茎、葉柄ようへい、花、果実・種子、毛根といった植物の部位ごとに章を設けています。同じ部位での、植物種ごとの違いや共通点を楽しんでください。第7章と第8章では、実際に顕微鏡観察を試せるように、サンプルの作製から観察まで実践的に解説しました。第7章では、簡単な操作ですぐに観察できるものを、第8章では、道具を用いてサンプルを作製し、より本格的に観察する方法を取り上げています。実際に、ご自身で顕微鏡を手に取り、観察するのは少し難しいかもしれませんが、それでもどのように植物を観察しているのかを知ることが、顕微鏡写真をより楽しむ手助けになると思います。

私は本書を植物顕微鏡アートブックのようなものとして書き上げたつもりです。ですから、種の同定を補助するような図鑑や、植物の微細構造の意義や発生メカニズムを解説する専門書とは少し趣を異にしています。むしろ、植物の中にある美しさを目にしてもらえればと思っています。その美しさが読んでいただいた方の心の中にひとかけらでも残り、日々の風景の中の植物に、これまで以上に目を向け、より深く植物を考えるきっかけになるのならば、著者としてこれほどうれしいことはありません。